

第 255 回 都市懇サロン レポート	「都市計画における流域思考の必要性」		
講 師	慶應義塾大学名誉教授 NPO 法人鶴見川流域ネットワーク代表理事 岸 由二さん	開 催 日	令和 3 年 11 月 9 日(火) 18 : 00~20 : 00
講 師 プロフィール	<p>専門は進化生態学。流域アプローチによる都市再生に注力し、鶴見川流域、多摩三浦丘陵などで実践活動を推進中。NPO 法人鶴見川流域ネットワーク、NPO 法人小網代野外活動調整会議、NPO 法人鶴見川源流ネットワークで代表理事を務める。関連著書『「奇跡の自然」の守りかた』、『「流域地図」の作り方』、『生きのびるための流域思考』。</p>	<p>当日の写真(お話中の様子)</p> 	
お話の概要	<p>【流域思考とは】流域という水循環単位の地形、その地形に対応する流域生態系についての理解を、安全(防災)・魅力・生物多様性保全を重視する都市創造にむけて生かしてゆく考え方である。1980 年から流域総合治水(流域圏でのグリーンインフラ、水田・調整池・調節池等の保水・遊水施設等の設置)を実践してきた。</p> <p>【小網代の森】面積 70ha、相模湾に面する小網代・浦の川流域。当地域はバブル期に鉄道延伸・農地造成・住宅造成・道路延伸・ゴルフ場リゾート基地の開発構想があり、そこに流域思考を取り入れる形で地域の一部である浦の川流域を保全・治水し、50 年放置された荒れた笹藪を湿原に変身させ、2014 年に保水の森の役割を担う小網代の森施設を完成させた。</p> <p>【鶴見川流域の総合治水と温暖化大豪雨時代の到来】鶴見川は都市河川(一級河川)であり、流域人口 200 万人、87%が市街化している。源流は多摩丘陵、上流・中流・下流が神奈川県川崎市・横浜市。暴れ川と呼ばれた鶴見川の流域を市街化したことで、遊水・保水力が低下し、さらに大水害が起こるようになった。そこで、通常の治水対策(河川整備、下水道整備)と流域対策(保水・遊水・減災対策)を合わせた鶴見川流域総合治水(1980-)を実践。※都市開発対応の流域治水。後に流域治水(2020-) ※全国流域を対象に温暖化豪雨時代到来に備えた流域治水対策・鶴見川流域水マスタープラン(2004-)へと繋がる。流域総合治水の取組みは、治水面では河川改修・地下貯留管の設置、流域面では源流保水の森創設・5,000 を越す雨水調整池・遊水地(新横浜多目的遊水地)の設置等。流域治水の今後の課題として、温暖化がもたらす計画規模豪雨やゲリラ豪雨、海面上昇に対する新たな対策が求められている。</p>		
意見交換の概要	<p>生産緑地の治水面での有効性について→各自治体の条例等で地域で規定する流出率など具体的な指定がある。生態系アセス実施時の視点→開発地の当該地と周辺の小領域区分のアセスで下流域の氾濫リスク等が分かる。</p>		
記録者のひとこと	<p>「新横浜多目的遊水地の治水力は流域対策、河川・下水道対策の2つの下駄をはいている」、「流域のプラクタル構造を基本理解し都市計画せよ」の話が印象的だった。 ≪都市懇サロン運営部会 委員 記録者の氏名 高橋 晴也 記入≫</p>		